勇者のセカンドライフ

タイヨウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者のセカンドライフ

【Ｎコード】
Ｎ４７９９Ｆ

【作者名】
タイヨウ

【あらすじ】
勇者となったはずの、ロイスはうっすらと残る意識の中、思っていた。「俺、死ぬのかなぁ」そして、始まる。元勇者の生活。どうぞ、お楽しみに

0日目：プロローグ

■――空虚なココロ――

俺は世界を救った。

魔王を倒した時、魔王は言った。

「世界を・・・大切にね。勇者さん」

そう、美しい笑顔で。

「ロイス！！」

遠くで、仲間の声がする。

光が俺を包んでいく。

そう、新しく始まる世界の光が俺のことを包んでいった。

（なんだよ、なんかあっけないな・・・）

そう心の片隅で思いながら、ゆっくりと周りの景色が消えていく。

「ロイス＝リュート！！」

仲間が手を差し伸べてくる。

妙な浮遊感のなか、その手にすがろうと手を伸ばす。

が、

俺の意識はゆっくりと消えていった。

まるで、死んでいくかのように。

1日目：目覚め

■――新しき光――

まぶしい。

「・・・きろ」

なんか耳元で聞こえるが、気のせいだろう。

「お・・・ろ・・・って」

だいぶうるさいな。人が気持ちよく寝てるってのに。

「うるせぇ、俺は眠いんだ。マリノ」

「ブチッ」

ん？なんか嫌な音が・・・。

「起きろってんだろ！！変人！！」

ゴスッ、メリっ

「グオワッ！！」

今凄い音、しましたよ！！

っていうか俺のわき腹に何か硬いものがぁ！！

と目を開き、思い切り上半身をあげた。

「「ムッ！」」

なにか、口に柔らかいものが・・・。

目の前に、見知らぬ女の顔。しかも、超接近。

と思うと急に女は俺のことを突き飛ばした。

ゴッ！

「いったぁ・・・」

「な、何すんのよ。この変態！！」

チャチャーン

勇者は変人から変体にランクアップ・・・

じゃねえ！！

「なんで、変態なんだ！ってお前は誰だ！！」

「うるさい、か弱き乙女の唇、いきなり奪いやがって何様だこのやろう！！」

「は？お前がか弱き乙女だぁ。んなわけあるわけ・・・」

ってまてよ、

今、真っ赤になってうつむいてるこいつはなんて言った？

「唇を奪った」？ということは・・・。

ゴスッ

俺は、あまりのショックに地面に額をこすりつけた。

「俺のファーストキス・・・・」

「はぁ？」

実は勇者は純情なのだ！！

そんな、豆知識はよしとする。

その言葉に、ぶるぶると震える少女、

「ふ・・・」

「？」

涙目の勇者

黒髪のロイス＝リュートは深く体勢を低くした少女は、

真っ直ぐロイスの顎に拳を突き上げ、

「ふざけるなぁ！！」

と、真っ直ぐアッパーを食らわした。

（なんなんだ、この女）

意識が遠のくなかそう、思うのであった。

2日目：見知らぬ女

■――謎の女？――

ロイスが、もう一度目覚めるとパチッ、パチッと粋な音をたてて火が燃えていた。

「ロイス、やっと起きたの？」

そこにいたのは、魔王を倒す旅で一緒に旅した。

ルクマ＝キトが、薪をかかえて立っていた。

彼女は、黒髪のショートヘアーで鼻が少し高く、精悍な顔つきだった。

「ああ、寝ちまったんだな」

「そうよ、見張りするとか言っておきながら」

少し怒ったように言いながらも、

表情はどこと無くにこやかだったので、本気で怒っているわけではなさそうだ。

あたりは暗くて何があるか分からない。

焚き火の横には、コウリア＝セルフィドが、静かに火の番をしていた。

「悪いな。コウリアも」

「ああ」

彼はそう短く答えて、鋭い目つきをこちらを一瞥して、

また、火を見つめ始めた。

銀色の髪の中から、少しだけ見せているとがった耳がピクピクと動いていた。

そう彼は、エルフなのだ。

「サンキュウ」

軽くそう答えると、耳をピクッと動かせて答えた。

「それは、そうと・・・」

そう耳元で、声がしたかと思うと目の前にルクマの顔があった。

「ど、どうしたんだ？ルクト」

その表情は笑っているのだが、どこと無く恐ろしい。

特に、いつもの青い瞳が危ない雰囲気をかもし出していた。

彼女は、俺の耳元に、口を近づけたと思うと、

「起きろぉーーーーーーーーーーー！！！！！」

「のわっ！」

ドスンッ

急に体が浮いて、どこかに落ちた。

辺りを見ると、そこは普通の民家だった。

「んあ？」

「やっと起きたのか。この変態」

目の前に、ルクマ・・・じゃなく、どこと無く見覚えがある顔があった。

「えっと・・・」

しばらく、その赤い髪のツインテールの女を見つめていると、

「なに、あほ面さらしてんの？」

と怪訝そうな目で、ロイスを見つめていた。

そんな時、

「あ、そうだ」

とロイスは、手を打って女を指差し、

「あの、いきなり殴り始めた女！」

「うるさい、あんなことされたら誰だって殴るわ！」

あんなこと？

「あー！俺のファーストキ」

「言うなぁ！！」

女のアッパー。クリティカルヒット！！勇者に２００ダメージ。

そのまま、ロイスは弧を描いて地面に

グシャ

落ちた。

そして、ゴングは鳴り響き・・・・・ません。

「何すんだ、暴力女！」

ロイスは、倒れた状態から顔だけあげて、その女をにらみつけた。

「その暴力女、ってのやめな。私にはパナム＝セクトルっていう名前があるのよ。変体」

「俺だって、変態じゃなくて、ロイス＝リュートっていう名前があるんだ。バカ女」

「バカ女、言うなっての」

不意に、彼女の顔が少しゆがんだ。

ロイスは、その変化を見逃さず体をおこして、その場に座ると、

「どうした？」

と尋ねた。

「えっと、ちょっとまって変体」

「変体じゃねぇ！」

「うるさい！っていうかロイス＝リュートってどこかで聞いたような・・・・」

ロイスは、立ち上がって頭をかきながら、うんざりした様に窓の外を眺めた。

「おっ、雪じゃん。珍しいな」

「は？」

考えていた、彼女は意識をそがれたようだ。

一緒になって外を眺め始めた。

「ここでは、毎日のことよ。ここら辺の人間じゃないの？」

「ああ、俺はセブレラっていう田舎の村が故郷だな。
雪ってことはここはヴェリセンドか？」
彼女は驚いたように、ロイスを見た。
ロイスは窓際から離れて暖炉の前に行き、手をかざした。
「あなた、旅人だったの？」
「やっと変態から格上げかな？」
すると、彼女は気づいたように口元に手をあてて顔をしかめた。
「なんだ、その顔。めちゃくちゃ傷つくんだけど」
「・・・いいから、答えなさい。変態」
「・・・」
ロイスは、たじろいでいるパナマを見て少しため息をつくと、
「そうだよ。ちょっと用があってな」
そのちょっととは、魔物討伐だったのだが・・・。
「へぇ・・・」
そんな時、階段の上の扉が不意に開いた。

ロイスはスッと身構えた。
そこにいたのは、
「おお、小僧。起きたか」
白髪の老人だった。
背はパナマより少し低く、背が曲がっていた。
「私のおじいちゃん」
パナマがそういうと、ロイスは警戒を解いた。
「わしは、ガルト＝セクトル。その身構え、只者じゃないな？」
老人は、うれしそうにロイスに尋ねた。
ロイスは頷きもせず少し笑みを返した。
「それに、パナムの唇も奪ったわけじゃしの」
「「は？」」
ちょっとまて、このじじい何さらりと爆破スイッチを押してしまいやがりましたか？
真っ赤になって、硬直しているパナムを横目で見てすばやくしゃがんだ。

「おじいちゃんの・・・」
すばやく近づくと、真っ直ぐ、
「バカーー」
ストレートをはなった。が、彼は軽く横に凪いだ。
パナムのストレートは横の壁に当たり、その壁にめり込んだ。
（マジかよ。俺あんなの食らってたの？）
自分で自分が怖くなった。っていうか、じいちゃんスゲー。
と内心冷や汗を流した。
「すぐ、たじろぐな。情けない。その程度なら、勇者のようにはなれんぞ」
（勇者？）
そういえば、俺は魔王をこの手で倒したような・・・。
涙目でうなっていたパナムはそれを聞いて、飛び上がり、老人の肩をつかむと、
「おじいちゃん、勇者の名前ってなんだっけ？！」
と揺さぶった。

「なんじゃ、やめろ。こらパナム」

その言葉で、パナムは「ごめんなさい」といって手を離した。

ガルトは一つ咳払いをすると、

「ロイス＝リュートに決まっておろう。そんな事も忘れたのか？」

「・・・・」

パナマはいきなりフリーズしてしまった。

「？どうした？パナム」

そういって、俺に目を向けられるが、

「さあ？」

と適当に答えてそこにあったイスに座ろうとした。

「なぁーーーーー！！」

という大声で、俺はイスに座り損ねて、床にしりもちをついた。

「なんで、勇者と同じ名前なのよ。あんた！」

「たまたまだろ」

適当にばっくれてみる。

「あ・・・そう・・・」

そのまま、終わりそうになった。

3日目：扱いひどくね？

■――勇者？従者？――

「って、そんなわけないでしょ！！」

この前の続きです。

「いや、違うだろ」

「そうじゃな」

「ちょっと、そう感じてるの私だけ？！」

ロイスは適当にあしらって、イスに座りなおす。

（このじいさん・・・）

ロイスは、微妙に含み笑いでパナムを見ているガルトを不信な目で見つめていた。

（気づいて・・・るよな・・・）

ロイスは、戸惑っているパナムを横目にロイスは立ち上がり玄関の扉に手をかけた。

「ん？」

「「どうした？」」

「なんか、外から歓声が聞こえるんだけど？」

「え？」

「そんな事は、無かったようじゃったが・・・」

そういって、ガルムはロイスを押しのけて扉を開けた。

「「「「ワーーー！！」」」」

扉を開けると、雪の中、寒さ対策をしまくった人々が列を作って歓声を上げていた。

「なんじゃこれは・・・」

ガルムが驚きながら道端にいる男に話を聞いていた。

すると、パナムは気だるそうな目をしてロイスを見つめた。

「本当に勇者じゃないのよね・・・」

「あー・・・違う違う」

適当に答える勇者だった。

「で、これはなんなの？」

「知らない」

さっきから歓声が上がりっぱなしの集団を冷えた目で見つめる二人であった。

「めずらしい、こともあるもんじゃのう」

とガルトが、情報収集を終えて戻ってきた。

「どうだったんだ？じいさん」

「めずらしく、ここを王族が通るらしいのだ」

「王族が？」

王族とは、要するに王様の家系の人なのであった。

「めずらしいわね、雪でも、って降ってるか」

「そうだな。パターンどうりの台詞ありがとう。パナムさん」

「う、うるさい。変態」

そんな二人を、鬱陶しそうに手で払いガルムは、

急に歓声が大きくなった方向を指差し、

「ほれ、来たぞ」

と、興味なさげに言った。

「わぁ」

パナムが思わず声を上げたのも無理はない。
それほど、豪華な集団だった。白い服を身にまとった騎士団がゆっくりと歩いていく。
「ほう、結構な騎士団だな」
「そりゃあ、王族じゃからの」
ロイスはそれを聞くやいなや、軽く大地を蹴って高く上に上がった。
あっけにとられていた、二人に、
「ちょっくら、見てくる」
と告げて、ロイスは観客の一番前に躍り出た。
「さて、どこの王族かな？」
ロイスは目をこらしてその戦隊が通りすぎるのを見守った。
そんな時、ふと視界の隅に見慣れたような人物を見たような気がした。
「あ・・・・、気のせいだよな。まさか、クロエスの軍団ってことは・・・」
そうつぶやいた時、後ろにただならぬ殺気を感じて、ロイスは振り返った。

「全くあいつ、なんなの、やっぱり只者じゃないわよね」
「そうじゃな、あいつはたぶん勇者じゃろうから」
「は？」
パナムは、ガルムの言葉を聞きすばやく反応した。
「おじいちゃん、やっぱり分かってたんじゃない！！」
「ほっほっほっ、そんなのも見抜けぬとは。まだまだじゃな」
「っていうか、おじいちゃん騙してたでしょ！！」
怒りながら、パナムは今までの勇者像と今のロイスを比較し、
「はぁーー」
大きく肩を、落とした。
「まあ、そんなに気を落とすな。あの者は、強い。
あの面だけが奴の本質ではないであろうしな」
「うん」
ことごとく、人の心を読むのが得意なガルムだった。

「ところで・・・」

とパナムが話を切り出そうとしたとき、

「ぎゃあああああああああああ！！」

と、この世のものとも思えない叫び声が・・・。

「今のって、ロイスのよね」

「・・・そのように聞こえたが」

二人は、ざわついている人ごみの中に向かって、叫び声の主を探しに行った。

4日目：苦手な皇女

■――王女は苦手だ――

「やめろバカ！離せ！」

「嫌です、やっとまたお会い出来たのです。

もう、結婚していただけるまで離しません！！」

パナム達が、たどり着いた時そこには、信じられない光景が広がっていた。

「王女さま、おやめください」

「民衆の前ですよ！はやくお戻りください！」

「いいのです。彼を連れて行くのです」

「よかねぇ！！離せ！」

「「あーーー」」

二人は、どたばたと暴れまわっている王女らしき人とロイス。

それを囲んでいる騎士たちのあわてよう。

どうしようか戸惑っていると、必死に逃げようとしているロイスと目が合った。

「「「あ・・・」」」

二人は気まずそうに冷や汗を流して、

「おじいちゃん、なんか見た？」

「いや」

「そうだよねぇ」

二人は凍りついた笑顔を作ってそのまま帰ろうとした。

「おいっ、待てよ。パナム、ガルム！！」

（名前、呼ぶなよぉ）

内心、冷や汗まみれでそう叫ぶパナムだった。

ガルムは、笑顔を引きつらせながら固まっていた。

「おい、お前ら。こいつの知り合いか？」

騎士が二人に声をかけると、二人は笑いながら、

「「いえ、知りません」」

と即効で答えて、二人は逃げていった。

「おいぃ！！」

「どうしたの？勇者様。またお会いに出来た、この奇跡を分かち合いましょうよ。

このクライ・バイハムと一緒に」

とロイスに頬ずりをするクラムという少女。

雪と似た色の白銀の髪、真っ青なブルーな瞳。どこから見ても美少女だった。

「俺は、勇者じゃねぇ！！」

勇者の奥義１

口からでまかせを言う

説明しよう！！勇者はその場その場で適当なこと言うから、

色々と面倒ごとに巻き込まれるのだった。

「どこからどう見ても、私の勇者様ですわ」

「いつ、俺がお前のになった！？」

「ほら、やっぱり勇者様」

「し、しまった・・・」

その瞬間、騎士たちがざわめいた。

周りの群集には、聞こえていないようだった。
そして、こそこそと話し声が聞こえ始めた。
「って、んなわけあるかぁ！！」
「そ、そうなのですの？」
ついに、クラムがうろたえ始めた。
このとき、ロイスは行ける！！と思ったのだった。
「まあ、いいですわ。一緒に私の城に・・・」
「ちょっ、待て！！」
相変わらず、人の話を聞かない奴だ。
内心冷や汗をかきながら、逃げていったパナムたちと、
興味本意で見に行った自分を恨んだ。

過去？日目：皇女との出会い

■――クロエス（過去）――

それは、まだ俺が世界を救う、旅の途中だったころの話。

「もうすぐだな。クロエス」

「そうねぇ、やっとフカフカのベットでねられるぅ」

ルクマが、うんざりしたように言った。

青い髪の青年、セキライ＝クローバーが、赤い弓を肩にかけ直しながら、

その呟きをだるそうに聞いていた。

「そんなことより、早く行きましょう。モンスターの相手はもうこりごりです」

俺たちは、ついさっきまでセッド村という所を襲おうとしていたモンスターの大群を、

始末してきたところだった。

「全く、面倒だよな。魔王の差し金か？あれは」

「そうかもねぇ、って、あの時絶対、私のほうがたくさん倒したって」

「お前…、案外、余裕あるよな」

その後、その村で宴でも行われそうな勢いだったが、

ダダをこねるルクマを引っ張って逃げてきた、

「だって敬われるのって嫌いなんだよなぁ。」（勇者談）

そして、その村で唯一モンスター共と勇敢に戦っていたセキライが

一緒に行きたいと言い、

今、一緒に旅をしている。

「それより、腹減ったぁ」

「ほら、見えてきましたよ。クロエス城」

セキライの、その一言でルクマは瞳を輝かせて、

「ベッド！！」

と、叫んで、先に走っていってしまった。

あっけにとられているセキライに、

「いつもの、ことだから」

と、肩を叩いた。

「…」

返事がない　ただの屍のようだ

「よし、ほっとくか」

「ちょっと、待ってくださいよ！！多少は、リアクションとって下さい」

「あれ？お前、そんなキャラだっけ？」

「いいじゃないですか、っていうか早く追いかけましょう。見失いますよ」

「もう、見失ってるって」

「あ…」

「今の、あいつに追いつけるのは、ショー・マッハくらいだな」

ショー・マッハとは、この世界でもっとも早い移動魔法を使う、魔法使いである。

「そんなですか！？」

「うそだ」

「うそかよ！！」

もう、なにがなんだか分からなくなってしまったセキライだった。

（もう、タメ口だな。多少は打ち解けたのかな？）

「まあ、そろそろ追いかけますか」

「…はい」

セキライはとても疲れた顔をして、歩き出したロイスの後を歩きはじめた。

――――――――――――――――――――

「「マジで？」」

ロイス達がルクマに追いつくと目の前には、かなり大きな宿が建っていた。

「本当に、ここなのか？」

「そうだと…おもいますよ」

呆気にとられている二人に、上から声が降ってきた。

「おーい、二人とも。３０６号室にいるから。早めに来てね」

と、ルクマはウインク交じりで言って、窓を閉めた。

二人は、しばらく呆然と立ち尽くし、セキライが、

「これも、いつもの事ですか？」

と、尋ねると、ロイスは青い顔をして黙って首を横に振った。

そして、二人は周りを気にしながら中に入っていった。

そのころ、ひらひらと白い冷たい塊が、空から降り始めていた。

「遅かったねぇ」

３０６号室、どう見ても高そうな部屋の中で、ルクマがくつろいでいた。

「お前…なにやってるんだよ」

「ん？普通にくつろいでるのよ。二人は隣の部屋ね」

「いえ、それより、ここ高いんじゃないんですか？」

「え？」

何を言われたのか分からないというようにルクマは首をかしげた。

二人は思った。

「「こいつ馬鹿だ！！」」

と、

「口に出してるわよ」

「「しまった」」

「息ぴったりね」

ルクマはにこやかに言って、二人に瞬間的に手刀を頭頂部にくらわした。

「がっ」

「うっ、調子のんな、ルクマ・・・」

そのまま、意識は遠のいていった。

過去？日目：お星様？

■――事件発生――

ドガァン！！

「ん？」

いきなりの爆発音によって、セキライは目を覚ました。

隣には、いまだに気を失って眠っているロイスを見て、

さっきルクマに食らった手刀の痛みがまたよみがえってきた。

ロイスに声をかけようとしたが、

「うーん、もう食わねぇ。っていうか無理…」

とやけにはっきりとした寝言をしゃべっていたので、

一気にやる気を失った。

「あちゃぁ」

そのころ、この殺害（未遂）の犯人ルクマは窓際で外を見て、

苦笑いを浮かべていた。

セキライはルクマの隣に立って、尋ねた。

「どうしたんですか？」

「あ、起きたんだ」

悪びれる様子も無く、まるで当たり前かのように笑顔を向けてくる。

セキライは、それに苦笑いで答えるしかなっかた。

「ええ、まあ。それよりどうしたんですか？」

「うん、あそこ」

そう言ったルクマの指先に目線を送ると、そこには、大きな黒い煙が立ち上っていた。

「あれ、なんですか？」

「知らないけど。爆発したのお城みたいなのよね」

「へぇ」

「それで、さっきなんか女の子抱えて逃げていく男の集団が、ここの通りを通っていったんだけど」

「ちょっ、何で止めなかったんですか。犯人かもしれないじゃないですか」

「だって、めんどいんだもん」

かわいこぶって言っているルクマだったが、逆にセキライは思い切りドン引きしていた。

（口にしていったら、何されるか分かったもんじゃない）

と身震いしながら、すると、

後ろから遠慮のない聞きなれた声がまるでセキライの心の声を、

そのまま言ったかのような台詞が、つぶやいた。

「ルクマー、全く可愛くないぞ。逆にめちゃくちゃ怖い」

それは、今目覚めたように目をこすっているロイスだった。

勇者の攻撃　考えもなしに言葉を言う

（ロイスサーン！！今、それはモンスターの怒りを買うのと同じですよぉ！）

ルクマはゆっくりと窓際から、

ロイスに近づくとロイスの襟首を持って窓際まで引きずってきた。

満面の笑みのままで。

「ん？どうした、ルクマ。なんか楽しいことあったのか？そんなに笑顔で」

（違う！！っていうか、ロイスさん寝ぼけてるのか？）

セキライはそっと窓から離れてソファーを盾に隠れた。

すると、ルクマはロイスをそのままクルクルと振り回し始めた。

まだ寝ぼけているのかロイスの頭からは、ハテナマークが浮かんでいた。

次の瞬間、ルクマの瞳がキランと光り、

「星にでもなってこーい！！」

と、窓からロイスを放り投げた。

あの細身の体のどこにあんな力が・・・。

とあらためて、セキライは恐ろしく感じていた。

そして、勇者は星になった。

おしまい。

じゃ、ないですよ！！

過去？日目：お星様？（後書き）

はいどうもぉ！受験真っ只中です。炎道です。
というわけで、受験なのでかなり更新が遅れています
皆様には、ただいな迷惑をかけてしまい。
本当に申し訳ありません。
ちょくちょく、更新していきたいと思いますが。
出来たら、間違いなどを直すほうに力を入れたいので
ご指摘お願いします。

あ、忘れてた。
あけましておめでとうございます。
今年もがんばっていくので、よろしくお願いします。
それでは、また後日。

ロイス「皆、また見てくれよな」
いやいや、終わりじゃないから・・

過去?日目：帰ってきた勇者

■――帰ってきた勇者――

「ふう、ここまで逃げりゃあ。大丈夫だろう」

「むー！！」

「へっ、王女もこうなりゃただの一般市民だな」

「いいや、こいつにはまだまだ役に立ってもらう。

こいつを盾にすればどこでも逃げられるしな」

そういって、笑みを浮かべる男たち。

いきなり城に攻め込み金目のものと、王女をさらって行った盗賊。

王女はその言葉を聞いて愕然としていた。

（私のせいで、お父様が…）

そう、彼女の父はこの盗賊達に襲われ怪我をおった。

彼女の父、クロエス王国の王。

レンド＝バイハムは王女、クラム＝バイハムを助けるために飛び込んだのだが、

返り討ちにあってしまった。

（お父様…）

「しかし、あんたのおかげで助かったぜ」

そう、男の一人が言った。その目線の先には、金髪の大きな剣を肩にかけた男がいた。

その男は、どこから見てもこの集団からは浮いた雰囲気をかもし出していた。

その男は、ちらりと王女を見たが、はき捨てるように、

「問題ない」

と答えた。

「いや、あんたが、あんなに魔法を使えるとは思いもしなかった。しかも、強力な。あの爆発のおかげで俺たちは逃げられたんだからな」

（爆発…）

あの爆発は、この男が起こしたものだったのだ。

その爆風に巻き込まれ多くの従者が傷を負った。

王女は精一杯その男をにらみつけたが、男は悪びれる様子も無く、

ゆっくりと立ち上がった。

「これで、俺の仕事は終わったな？」

「ああ。助かったぜ。これからもよろしくな」

その言葉に、男は驚いたように講義の声を上げた。

「なんだと！これで、終わりの約束だろう！！」

「おいおい、そんなこと言っていいのかよ。あいつ、死ぬぜ？」

「クッ・・・」

（なんの話だろう・・・）

王女は、思考をめぐらせながら逃げる算段をしていると、頭上に輝く星が一つ。

「？」

「なんだ、ありゃ？」

ヒュルルルル・・・ドゴォ！！

「うわあぁぁぁぁ！！」

落ちてきた、隕石のようなもので盗賊の男たちが吹き飛んでいく。

（何？これ）

「いってぇ・・・。たく、ルクマ少しは加減しろよな・・・」
そこにいたのは、少し赤い色の混ざった髪の少年だった。
その少年の周りには緑色の光が舞っていた。
「なんだ、お前は！」
「ん？俺は、ロイス＝リュートだ。っていうかお前らは？」
そういって軽く微笑みながら立ち上がる彼は、クラムには輝いて見えた。
（救世主さま・・・）
「ロイス＝リュートだと！？あの勇者と謡われるやつか・・・」
「へぇ、俺って結構有名なのか？」
少し自慢げに胸を張って言った。
「てめぇ・・・」
ロイスは睨みつけられているのを全く気にすることの無いように、クラムに視線を向けた。
「おいおい。大丈夫か？」
そういって、テープでふさがれていた口を開放してくれた。

「助けてください！！」

外れた瞬間、クラムが言ったのはその言葉だった。

「は？」

「助けてください。この者たちに王国を襲われて、私のお父様は・・・。

私は、クロエス王国のクラムと言います。勇者さま、どうか・・・」

その言葉に、初めロイスは驚いたが、少し口元を緩めて笑顔を作ると、

「了解だ。クラム」

そう、今日の献立を決めるかのように軽く言った。

「さあ、勝負！」

過去？日目：帰ってきた勇者（後書き）

炎「どうもー。舞い戻ってきましたー」
ロ「おお、戻ってきた」
炎「受験戦争は終わった…」
ロ「はいはい、おつかれさん」
炎「お前、適当だな…」
ル「そりゃあね。ロイスだもん」
ク「そうですわ。私の勇者様ですから」
ロ「なっ！」
炎「お前、モテモテ？」
ル「ちょっと、何が「私の」よ！」
ク「いいじゃありませんの？事実ですし」
ル「どこが！！」
セ「ロイスさん。大変ですね」
ロ「言うな…」
炎「まあ、そんなこんなでまた再開しました」
ロ「それでは」
ル「これからもよろしくね」
ク「ですわ」
セ「続きますので」
ロ「俺の活躍に期待してくれ！」
炎「それでは、また後日」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4799f/

勇者のセカンドライフ

2010年10月11日21時06分発行